

金融市場動向

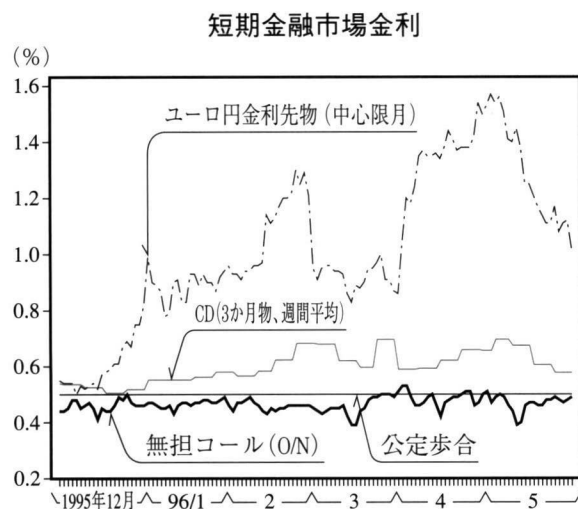
— 平成8年5月 —

(平成8年6月17日)

1. 短期金融市場

5月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、概ね公定歩合をやや下回る水準で推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートは、月央から弱含み、月末には0.5%台半ばまで低下した。ユーロ円金利先物中心限月（3か月物、金利ベース）は、月初は1.5%台で推移したが、月末には1.0%台前半まで低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は、40兆110億円と前月（42兆2,585億円）に比べ減少した。

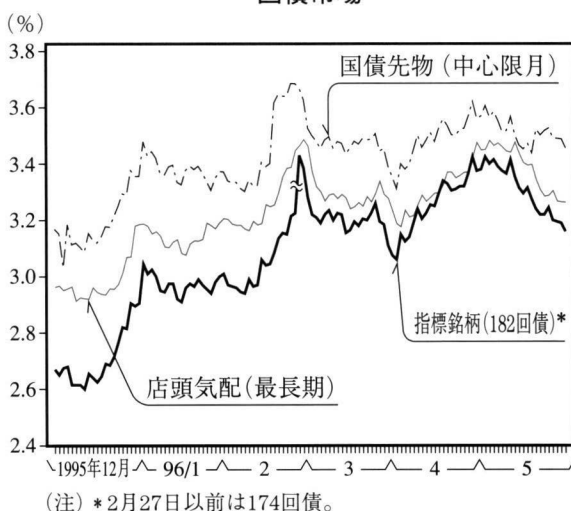


2. 資本市場

5月の長期国債利回り（指標銘柄利回り）は、市場における金利先高観の後退等から中旬から

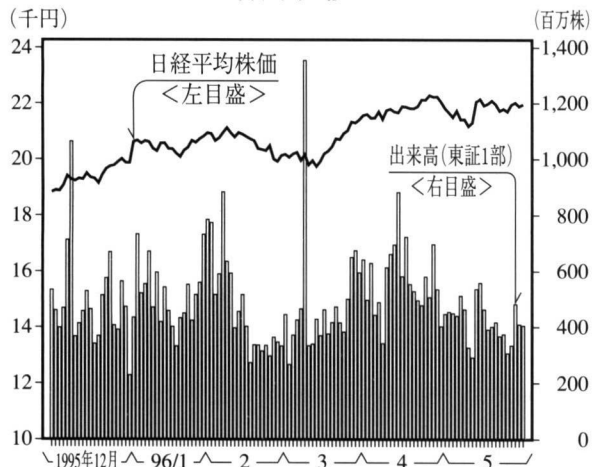
下旬にかけて低下し、3.160%で越月した（前月末3.375%）。国債先物中心限月利回り（中心限月は22日に96年6月限から96年9月限に移行）は3.456%（終値118.90円）で越月した（前月末3.560%＜終値117.99円＞）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を上回った。

既発債市場利回り
— 国債市場 —



5月の株式市況（日経平均株価）は、上旬は金利上昇懸念や為替円高化等を背景に下落したが、その後は幾分持ち直し、結局、21,956円で越月した（前月末22,041円）。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、4.21億株（速報）と前月（5.71億株）を下回った。

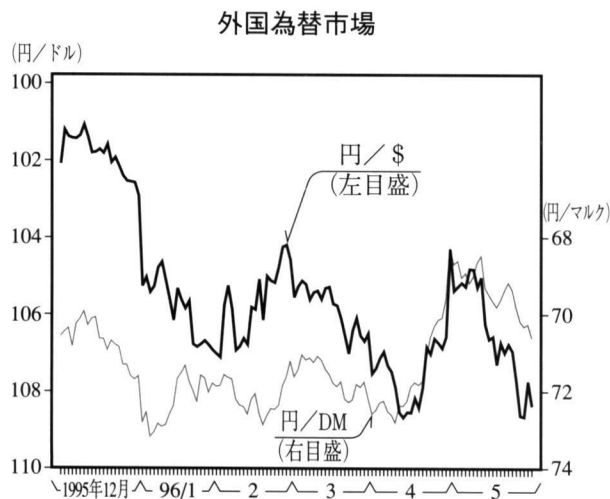
株式市場



5月の国内公募普通社債は、市場における金利底打ち感等を背景に、前月を上回る高水準の発行となった（4月5,320億円→5月6,820億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（増資を除く）は、大量発行がみられた前月に比べ発行額が減少した（4月4,485億円→5月1,120億円）。

3. 外国為替市場

5月の円の対米ドル直物相場（東京市場）は、



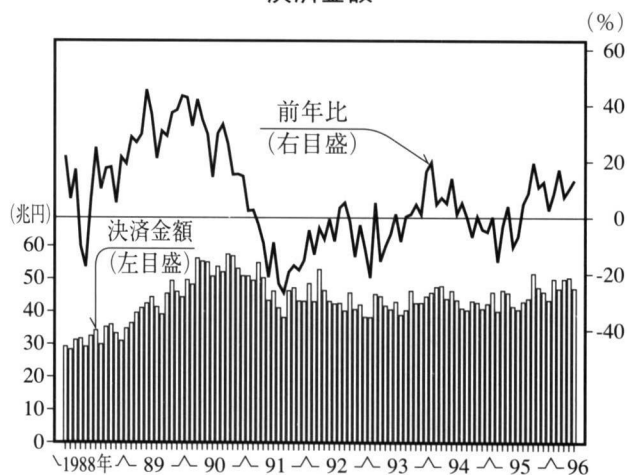
日米金利差等に着目した円売りから、月央より下落基調で推移し、108.37円（17時時点）で越月した（前月末104.29円）。また、円の対独マルク直物相場（東京市場）も、70.62円（17時時点）で越月した（前月末68.29円）。

この間、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は214.6億ドルと、前月（240.4億ドル）を下回った。

4. 決 済

5月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回り（前年比△12.2%）、全銀システム取扱高も前年同月を下回った（同△3.9%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+24.6%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った（移転登録：前年比+11.6%、振込口座振替：同+2.4%）。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

5月の資金需給をみると、銀行券要因は2兆3,976億円の余剰（前年同月2兆4,399億円の余剰）、財政等要因が1,112億円の余剰（同1兆9,085億円の不足）となったことから、全体では2兆5,088億円の余剰（同5,314億円の余剰）となった。

こうした状況下、日本銀行は売出手形等により資金を吸収した。

6月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因は公務員・民間ボーナス支払資金を中心に、月中2兆5,000億円程度の不足（前年同月2兆7,811億円の不足）となる見通し。財政等要因は、国債の償還や交付金（第2回普通交付税交付金）の支払いを中心に、7兆4,800億円程度の余剰（前年同月6兆3,691億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では、4兆9,800億円程度の資金余剰（同3兆5,880億円の余剰）となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

4月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.0%（速報）と前月に比べ0.1%ポイント低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.4%（速報）と前月比横這いとなった。

5月の銀行券平残前年比は+9.5%と前月（+9.9%）に比べ低下した。

5月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+2.1%と前月に比べ0.1%ポイント低下した。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+1.5%と、前月に比べ0.1%ポイント低下した。

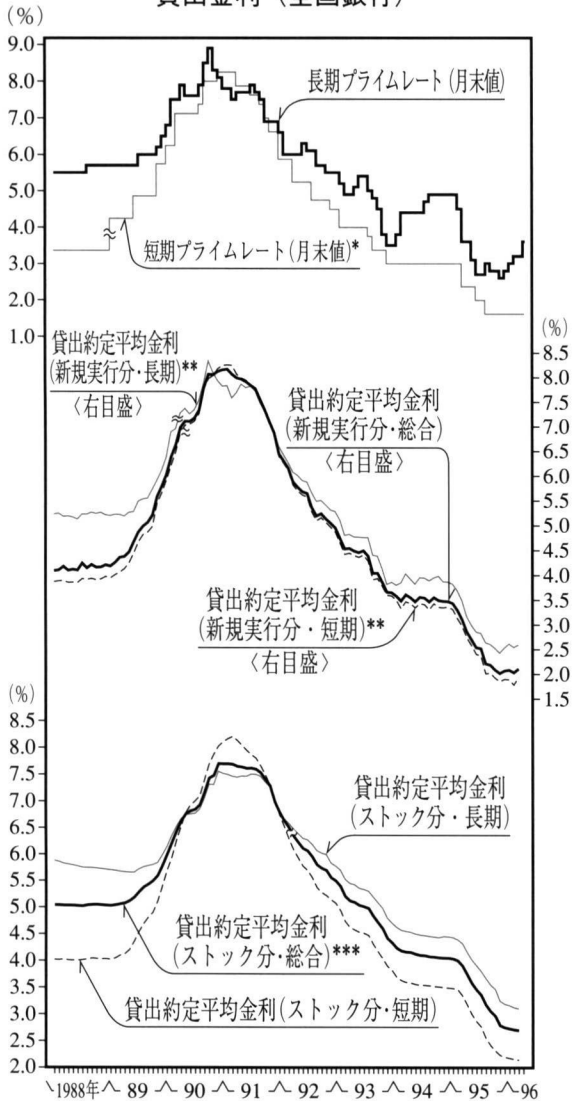
7. 貸出・預金金利

4月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分は、短期が3か月ぶりの上昇（前月比+0.152%）となり、長期も2か月ぶりに上昇（同+0.050%）したことから、総合でも2か月ぶりに上昇した（同+0.075%、3月2.032%→4月2.107%）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越がいずれも低下し（短期：前月比△0.016%、長期：同△0.020%、当座貸越：同△0.029%）、総合では34か月連続で既往ボトムを更新した（総合：3月2.709%→4月2.694%）。

この間、4月の定期預金金利（1千万円以上、3か月以上6か月未満の全銀新規受入金利平均）は、3か月ぶりに前月に比べ低下した（3月0.525%→4月0.521%）。

貸出金利（全国銀行）



1988年 89 90 91 92 93 94 95 96

(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)